

令和7年度第2回香川県水産審議会 議事録

1 日 時 令和7年11月5日（水） 13:30～15:00

2 場 所 アイパル香川 3階 大会議室（第5・6会議室）

3 出席者 嶋野（勝）委員、嶋野（文）委員、石原委員、平瀬委員、山口委員
山本（啓）委員、安岐委員、佐伯委員（代理出席：観音寺市 薦田農林水産課長）
（欠席委員：中村委員、山本（浩）委員、原委員、川田委員、勝田委員、宮本委員、常川委員）
委員15名中8名が出席しており、香川県水産審議会条例第7条第2項の規定により、本審議会は成立。

4 傍聴者 なし

5 議 題

（1）次期香川県水産業基本計画（素案）について

事務局より、資料に基づき次期香川県水産業基本計画（素案）について説明。

委員：10月の市場への水揚げ量は例年の6割ぐらいであった。もちろん天候等様々な要因はあるが、漁業者の多くが漁に出ても何も獲れていない状況になっている。今の市場は「物があっても売れない」ではなく「あったらもう少し売れる」という雰囲気だが、売る物がないので売れない。養殖魚もかなり値段が高いので、スーパー等での需要がなかなか伸びない。値段が高いと日常の食事として使われにくく、なかなか一般の消費者に魚を選んでもらえない。肉の値段は徐々に上がっているが、水産物はコロナ以降急激に上がっている。卸売の現場にいる我々でもついていけない物価高になっている。

私の肌感覚では、やはり水産物があることが大事なのではと思う。水産物の価値ももちろん大事だが、そもそも水産物がないと食べてもらえない。海の状況を取り戻す政策が急がれる。この5年でやらないと、後の5年でやろうとしても手遅れになるかもしれない。

もちろん、毎年4～5%漁師が減少する問題もあるが、水揚げ量が3～4割減ってくるとそれどころではない。ぜひ、漁場の環境改善等を行って欲しいが、このような取り組みは結果が見えにくく、本当に難しいと思う。

水産物は年々減っており、養殖についても全体的に数が少なくなっていることが値段を上げる要因になっている。値段が上がって養殖業者が儲かっているのかというと、全ての値段が上がっている所以で利益が出てない。こうなると水産業全体が誰もWin-Winでなくなってしまう。まずは魚が増えて、多くのお客さんに食べてもらうことによって循環が起こるのが一番大事なことだと思う。水質改善の事業（栄養塩類管理計画による取り組み）のお陰で昨年はノリが好調だったのかなと思うし、イイダコも一昨年に比べると去年の冬はちょっと増えていた。このような取り組みがうまくいけば、昔のように市場の中がイイダコだらけになるかもしれない。私も若いころには、12～1月はせりが終わってもずっとイイダコの雄雌を分けて、冷凍して次の日に売っていた。それくらい物があって、消費者の元に水産物が届いていた。もう一度、香川県の水産資源を増やすために、その環境づくりを、この5年間でやって欲しい。この5年間で最後のチャンスだと思うので、ぜひ、この計画に

書かれていることをまずうまくやっていただきたい。

事務局：魚を増やす取組みについては施策の柱の1つであり、豊かな漁場の創造には力を入れてやっていかなければいけないと思っている。

一方でハモやアカエイなどの魚を漁師が持ち帰らず海に返していると聞く。それがある程度の値段で売れる様になれば持ち帰ってくれるのかなと思うが、そういった魚の売り方や食べ方を広げるような動きはないか。

委員：アカエイは、20年ぐらい前は、佐賀県から11t車で運んでもらっていた。スーパーが買ってきて角切りカットにしてパックで売っていたが、最近は大手の資本が入ったことで、そのスーパーで売らなくなってきた。すると市場で買う人がいなくなり、漁師も持ち帰らなくなる。ハモも然りだが、売れない物を持ち帰ると、売れる物まで値段が下がってしまう。安いので持って帰らないという漁師の気持ちも分かるが、市場は売り先さえあれば持ってきてくれたものは売っている。

テレビ番組でアカエイの有効活用の取組みが紹介されていたが、昔のように市場でもアカエイを売れるようにできる可能性は十分あると思う。加工業者さんがミンチにして揚げて商品化していただけるのであれば、値段は高くはないかもしれないが、市場でも売ることにはできる。エイは貝やカニを食べるので、エイを減らすことで資源回復に繋がるのではないか。

アイゴについても、昔は宇和島市などから水槽車で運んでもらって売っていた。当時は手の平サイズのアイゴがキロ2,500円くらいで売れていた。アイゴもスーパーが売らなくなると、市場で値段がつかなくなって漁師も持ち帰らなくなる。販路、消費先を見つけて、何とかして資源の有効活用ができるようにし、獲ってきたものがきちんとお金になっていくことが一番大事だと思う。県や市場、小売り、加工等も含めて、みんなで協力する必要がある。儲からないボランティアではなく、商業としてやっていけるよう、市場もそれに協力していきたい。

委員：11月となれば早いところではカキ養殖の出荷が始まる。先日、香川県漁協女性部連合会の役員会で伺った話だが、鴨庄漁協で一連分カキを剥いたが、手のひらに乗る分(150g)しか収穫できなかったという。秋種のカキは全滅に近い。身が全然大きくなっておらず、海水温の上昇がこんなにも影響を与えているのかという状況になっている。毎年冬に行われる「さぬき市冬のうまいもんまつり」では、例年カキをたくさん振舞っているが、今年はこのままだと提供できない。カキ焼き業者やカキオコの店主の方も嘆いている。ナルトビエイの影響もあるのかなと言われている。河口でエイが泳いでいる姿が見える。3年前にはなかった光景。

また、平成19年を境に肉(の消費量)が魚を逆転し、魚の値段はどんどん高くなって、消費者はどうやって家族分買うのだという状況になっている。出刃包丁なんて家になくという家庭も増えている。今月中旬に「ふるさと祭り」があり、子供に魚丸々1尾をさばいてもらう食育イベントを行う。小学生対象のイベントだが、保護者向けの冊子も用意して、少しでも魚の消費が増えるよう取組む予定。我々香川県漁協女性部連合会もお役に立てればと思っている。

事務局：食べて触れてもらうことは非常に大切なことだと思う。ぜひ色々な場で食育の取組みをやっていきたいと思っている。その際はよろしく願いたい。

委員：豊かな海を創造し水産業を未来につなぐということで、イイダコの増加やオリーブ水産物の生産尾数など、具体的な施策・指標が挙げられていることは大変素晴らしいと思う。この基本計画の素案の少し先の目線になるが、海水温の上昇だとか、栄養塩濃度の低下ということがこれからますます顕在化すると思われる。そうすると、今頑張っているイイダコやクロノリ、オリーブ水産物など、今まで香川県を引っ張ってきた水産物に加えて、変わりゆく海に適合する視点も裏で進めておいた方が良いのではと思う。例えば、「豊かな漁場の創造」の「資源を積極的に増やす取組み」のところで、「魚介類の増殖技術の開発」ということで新たにコウライアカシタビラメが挙げられているが、目標としている3件の倍くらいを裏で走らせておいて、うまくいったものを成果として挙げるというのも手だと思う。その中に、例えば従来獲れなかったが、これから海水温が上昇するにあたって瀬戸内海への来遊が増えることが予想される種だとか、ノリ以外の藻類種を検討してみると良いのではと思う。イイダコやノリを増やす目標は野心的で素晴らしいが、これからの海を見越した保

険的な対策があれば良いと感じた。

事務局：これから環境が変わっていくものにどう対応していくのかということは、常に考えていく必要があるので、そういう視点も持ちながら施策を進めていきたい。ただ、この計画の中では今後どうなってくるか分からないところもあるため、今後また検討させていただきたい。

委員：私は水産加工業をしており、昔からある程度量が獲れるマダコとナシフグについても加工している。ナシフグは今年もたくさん注文いただいて、てっさ等の商品にして販売している。マダコは10年ぐらい前に専用工場を作ったが、去年くらいからほとんどストップしており、今はインドネシアからシマダコを輸入して一部利用している。元々は香川県のマダコ専用でやっていたが、今はほとんど利用できていない。

先ほど他の委員からも魚が集まらないという話があったが、津田町漁協に関しては、今年の四月から高松の市場へ出荷するトラックがストップし、私の知る限りでは若い2人の漁師だけが自分で運んでいる状態。（魚を獲っても市場まで出荷できないため）他の漁師も漁船はあるが、生業としての漁業は辞めざるを得ない状況だと思っている。

私たちも水産加工業として残っていくために、どういうことをすべきか考えながら取り組んでいる。賑わいづくりという話もあったが、定置網で漁師さんに魚を獲ってもらって、それをうちで捌いて一緒にワークショップをするイベントを細々ではあるが4,5年前から開催している。きちんと告知をして、イベントの中で魚の即売会をすると、小さな町イベントでも午前中で魚は全て売れてしまう。また、外国人の方に漁業を体験してもらおうと、非常に喜んでもらえる。こうしたインバウンド向けの取組みもきちんとコンテンツ化すれば、漁師・加工業者にとって収益を上げるものにはなるとってはいるが、中々そこまでできていない。今は多くの人々が力を合わせてできることをやっていく時代だと思っているので、また力を貸していただきたい。

事務局：国が進めようとしている「海業」として、全国で地域資源を活用した様々な取組みが行われている。その海業の研修会の場で、「小さな成功体験を重ねていくことで、地域の人がある気になって、多くの人を巻き込むことができる」という話があった。そういった観点からも、色々な人と一緒になって地域を盛り上げていければと思っている。

委員：水産業基本計画というタイトルだが、内容が少し漁業に偏っているように感じた。観音寺市にも水産加工業があるが、漁業が地域の産業を支えているといった記述があると良いのではと思った。

担い手について、観音寺市や三豊市でも若い人の新規参入は少ない。県の方では中高年層への支援もあるようだが、会社に勤めている若い人の中にも、海に関心を持っている人は多い。釣りなど個人で海に親しんでいる人は多いが、それを生業としている人は少ない。農業の方では半農半Xといった取組みで、幅広い人材を集めている。漁業は元手が多く必要だが、リタイヤした漁師の漁具を活用するなど、マッチングする仕組みができればチャレンジする人も増えるのではないかなと思っている。

藻場造成については、漁業者からも多くの要望をもらっている。どうやったら育つか、造成したものが定着するのか、8haという目標は定着した面積なのか取り組んだ面積なのかという疑問点はあるが、非常に期待している。

魚の価格について、養殖魚は生産にそれなりにお金がかかると思う。消費者にそういった認識を持ってもらって適正価格で買ってもらえるようになれば良いのかなと思う。消費者の感覚をアップさせられるような政策ができればと思う。

事務局：以前、観音寺市の加工業者の方と話す機会があり、地域の漁業が我々加工業を支えているという話を聞いた。中高年層の方々へも（漁業就業に向けた）支援が必要になってくるので、地域政策として市町とも協力しながら進めていく必要があると思う。藻場についても、県だけではなく地域全体で進めていきたいと思っている。価格についても、おっしゃるとおりだと思う。養殖業者の方々とも相談しながらやっていきたい。

委員：全国的に水産業は厳しく、漁獲量や担い手は年々減っている。なかなか生計を立てるのに十分な価格や量が確保できないということに尽きると思う。もちろん、水温など気候の変化もあり、如何ともしがたいところではあるが、その中でも原因を追究しながら、小さなことでも取り組んでいく必要があると思う。未利用魚についても、漁業者の利益に結び付いていないところもあるので、地道な取組みになるかもしれないが拾い上げていかなければならないと思っている。そんな中で我々の組織は農林水産業とその周辺企業の色々と関係を持っており、そういった組織を結びつけたりする取組みをしている。この計画にあるなしに関わらず、こんなことができないか、こんな業者はないかという話があれば、ご紹介することもできるので、お気軽に声をかけていただければと思う。

事務局：相談したいこともたくさんあるので、引き続きよろしくお願ひしたい。

委員：オリーブ水産物の生産尾数について、私が海水魚類養殖漁業協同組合の組合長をしていた時は最高で28万尾を生産したが、現在は14～15万尾程度に減っている。県は増産する計画であるが海水魚類養殖漁業協同組合としてどう考えているか。

委員：海水魚類養殖漁業協同組合としても増やす計画をしているが、やはりオリーブ葉が高い上に身がやせるので、増肉を選ぶ生産者が多い。（オリーブハマチではない通常ハマチとして）海外輸出向けの生産に変わりつつある。ただ、私としてはオリーブハマチを増やしていきたいと思っている。

また、他の委員からも話があったが、5年先を見た魚、極端に言えば熱帯系など様々な魚種の養殖をしていかなければならない。香川県は夏に高水温になっても冬には水温が下がり、越冬できる海ではないので非常に難しいと思うが、それに応じた色んな魚を養殖してみると良いのではと思う。以前、サワラの養殖を試みたこともあるが、途中までは上手くいくが一気に全滅してしまう。そこを何とかできる方法があればと思う。

事務局：5年先を見越した養殖業について、今から考えていく必要があるのでは、何をするかということも含めて養殖業者の方と一緒にになって相談していきたい。香川の県木と県魚が一緒になったオリーブハマチが中心のオリーブ水産物なので、県としては何とか一緒に増やしていきたいと思っている。PRの仕方についても考えていきたいので、ご意見いただければと思う。

委員：ここ5,6年で瀬戸内海の状況が非常に変化している。春先のイカナゴは、2年連続の高水温、今年は30℃を超える水温となり、去年今年とほとんど獲れていない。大阪湾はここ4,5年獲れていない。愛知県、三重県の船びき網漁業も9年連続で休漁している。瀬戸内海もそのような状況になるのではと懸念している。また、タチウオ、シタビラメ、マコガレイ、アイナメ、イイダコ、マダコ、トラフグ、シリヤケイカがほとんど全滅している。東京湾でタチウオが獲れ、宮城県でトラフグ、北海道でブリが獲れている。日本近海で魚の棲む場所が変わってきている。しかし、暖かい地域の魚が香川の海で獲れているかというとそうではない。温暖化の影響もあるし、冬場の栄養塩不足は特にクロノリの生育に悪影響を与える。池田知事にも申し上げているが、我々の時代で起きたことは我々の時代で解決して、次世代に豊かな海を残してあげたいというのが我々の願ひ。県の水産課と力を合わせて、官民一体となって頑張って参りたいと思う。

以上